

D.ハーヴェイの空間編成の理論について  
——資本主義の空間構築——  
干場 薫 (一橋大学)

経済地理学者である D・ハーヴェイは、多数の著書の中で都市社会に内在する差別や貧困の問題など、資本主義経済の深刻な行き詰まりに対して様々な批判的政治的発言を行っており、近年、その影響力は経済地理学にとどまらず、多方面に及んでいる。経済地理学は、各地の地域的特性の差異を記述する学として、法則定立的な諸科学とは異なる性格を持つものとされてきたが、ハーヴェイはもともとこのような学問的立場に飽き足らず、1970年代以降、アメリカ合衆国にわたり、ラディカル地理学運動と呼ばれるものに身をおき、理論・空間・社会的正義・都市的生活様式という4つの軸をテーマに社会過程と空間形態相互の連関を研究するようになり、次第にマルクス主義に接近した。1976年から77年にかけて、フランス・マルクス主義の研究を意図してパリに滞在し、H・ルフェーブルから学び、建造環境の生産周期と景気波動とを結びつけて捉える視覚や、建造環境が資本主義的市場経済において持つ意義と限界を分析し、マルクス経済地理学の開拓者として注目されるようになったのである。

資本主義経済の発展過程において地理的不均等発展と都市と田舎の分離というのはつきものであるが、ハーヴェイはこのような地理的または地域的差異を単に個別的出来事と見なすのではなく、資本主義的経済空間を構築するための空間編成の理論として合理的に説明可能にすることを意図としている。

ハーヴェイはマルクスの『資本論』を地理学に取り入れるに際して、時間と空間は資本主義発展に内在的な問題次元として真剣に取り上げるべきものであることを強調しているが、本発表において、いかに資本主義が稼働するかを理解する上で空間関係の配置が重要であるかを考察し、つまり、ハーヴェイの空間関係から始める問題分析（『パリーモダニティの首都』におけるフランスの国家空間の統合、パリの内部空間の合理化、オスマンによるモダニスト的都市計画など）を取り上げ、資本蓄積の過程と空間編成についても考察を行う。資本蓄積の進行は、常に新たな空間を編成しようとし、新たな空間統合をもたらし、新たな建造環境は過剰資本のはけ口になる。だが、建造環境が減価をこうむるようになると、恐慌の契機となる。ハーヴェイが資本主義の矛盾をどのように捉えていたかを含めて、空間編成に着目することにより、資本蓄積の理論と共に、空間、あるいは、場所を支配する者が、つねに場所にかかわる政治的かけひきにおいて他を圧する強力な地位をにぎっているという運動論の視点も同時に示したいと思う。

《ハーヴェイの文献》

*The Limits to Capital*(1982) : Blackwell 邦訳『空間編成の経済理論』上・下、1989・1990年、大明堂

*Paris, Capital of Modernity*(2003) : Routledge 邦訳『パリ モダニティの首都』2006年、青土社